

オルタナティブ

人間論

文◎田坂広志
text = Hiroshi TASAKA

7

人類の知 第六の成熟
「理性の知」から「感性の知」へ

21世紀に起こる「人類の知 七つ
の成熟」の第六の成熟は、何か。

それは、「理性の知」から「感性の知」への成熟である。

言葉を換えれば、それは、「理性を使って考える」能力から、「感性を使って感じる」能力への成熟とも言える。

20世紀においては、世界を「巨大な機械」と見なし、そのメカニズムを分析し、解明し、理論化すれば、世界を自由に制御、操作、管理できるとする世界観、「機械論パラダイム」の世界観が主流であった。

そのため、この世界観においては、機械を細かく分解し、分析するようになり、物事を理性的、論理的に考える「理性の知」が、重要な能力とされてきた。

しかし、21世紀においては、世界を「巨大な生命体」と見なす「生命論パラダイム」の世界観が大きな潮流となる。なぜなら、情報革命によつ

て企業や市場や社会が「高度な複雑系」としての性質を強め、自己組織化や創発、生態系形成や相互進化的な「生命的システム」の挙動を示すようになったからである。

しかし、この「高度な複雑系」すなわち「生命的システム」は、ただ分解し、分析しただけでは、その本質を把握することができない。そのため、「生命論パラダイム」の世界観においては、世界の本質を感性的、直観的に感じ取る「感性の知」が、重要な能力となっていく。

では、「理性の知」⇨「論理的に考える力」ではなく、この「感性の知」⇨「直観的に感じる力」は、いかにすれば身につくのか。

そのために理解すべきことがある。「理性の知」とは「表層意識の知」であるが、「感性の知」とは「深層意識の知」である。

まず、そのことを理解しなければならぬ。

すなわち、我々が何かを「感じる」という状態は、「何かを「考える」という状態よりも、「心の奥深くの知」が働いている。

では、我々自身が気がつかない、その「深層意識の知」⇨「感性の知」を高めるには、何が必要か。

そのための技法は、幾つかあるが、ここでは一つだけ述べておこう。

レイチェル・カーソンの語る「センス・オブ・ワンダー」(世界の不思議に感動する力)を大切にすることである。

そして、その力は、カーソンが同名の著書で語ったように、自然の中に身を置き、自然に対して純粹な感覚を開放するという経験を積み重ねることによって、身につけていく。

なぜなら、我々の中の「深層意識の知」⇨「感性の知」は、表層意識の雑音から離れ、エゴの蠢きから自由になったとき、その静寂の中で、密やかに働き始めるからである。

たさか・ひろし◎81年、東京大学大学院修了。工学博士。87年、米国パテル記念研究所客員研究員。90年、日本総合研究所の設立に参画。取締役・創発戦略センター所長等を歴任。00年、多摩大学大学院教授に就任。同年シンクタンク・ソフィアバンクを設立。03年、社会起業家フォーラムを設立。08年、世界経済フォーラム(ダボス会議)のGlobal Agenda Councilのメンバーに就任。著書に「目に見えない資本主義」「未来を予見する5つの法則」など60冊余。